

クメール建築の伽藍構成についての基礎的分析

Basic Study on the Site Planning of Khmer Complex

2000年9月

荒樋久雄

1. はじめに

現存するクメール建築はその殆どが石造（ラテライト¹、レンガ造）の宗教建造物である。最古の建築は6世紀にまで遡るとされ、それ以降13世紀中葉までに数多の建物が建てられる。材料・建築形態など多様で、寺院平面・伽藍²配置の類型分類ならびに変遷研究は完遂されておらず、今後の進展を要する学問分野である³。そこで本稿ではクメール建築の代表的な遺跡を取り上げ、平面ならびに伽藍を類型化し、時代的な変遷過程を概観するものである。

2. プレ・アンコール期（6世紀～8世紀）

（「聖室 + 繞道⁴の二層形祠堂」） 現存最古の遺構の代表例であるアスラム・マハ・ルセイ（アンコール・ポレイ：6世紀頃）では、聖室の周囲に繞道がめぐらされた平面を持ち、初期インド建築に散見される類似した平面を持つ⁵。この様に聖室の周囲に繞道がめぐり、壁面が二重に配される建築はプレ・アンコール期の建築にのみ見られる⁶。

¹ ラテライト（laterite） サバンナ地域で、地表付近にレンガのように固まった鉄・アルミナの集積物。紅土ともいう。熱帯地方の高温多雨気候のもとで風化が十分に行われると、土壌の母材中の主要な成分であったケイ酸塩類が分解されてケイ酸が分離流下し、鉄・アルミニウムの酸化沈積物がほとんど土壌の全層を占めるようになる。サバンナでは雨期に激しい加水分解によってカリウムやカルシウムの塩基類が完全に溶脱したあと、乾期に土壌水分の急激な上昇がおこり、地表付近に鉄やアルミニウムの32酸化物が集積する。これが固い盤層を形成しクラスト（殻）となって、ラテライトとよばれる物質となる。鉄酸化物がヘマタイト（赤鉄鉱）であれば赤みの強いレンガ状の塊で紅土ともよばれるのにふさわしいが、アルミニウムの含量が多いものは灰褐色を呈している。ラテライトは土層内に生じた土壌物質の一つであるが、植物養分を欠き、耕作を不可能にする固い膠着（こうちやく）物で、開発の障害となるが、その固さを利用して建築材料に用いたのがインドなどでの習慣であった。アルミニウムに富む場合はボーキサイトとよばれる鉱床となり、インド、東南アジア、アメリカなどのアルミニウム資源の産地を形成している。（日本大百科全書 小学館）

² 〔梵 samgharama（僧伽藍摩）の略。僧園・衆園・精舎と訳す〕寺の建物。特に大きな寺院。僧伽藍。

³ 同研究の代表的なものとして、池上京子ほか「クメール建築の設計方法に関する研究」1997：1998年度日本建築学会梗概集

⁴ 繞： まとう。まつわる。まつわりつく。 めぐる。まわりを回る。とりまく。

⁵ マハバリプラムの海岸寺院（8世紀）やカーンチープラムのカイラーサナータ寺院（8世紀）まで。しかし、ヒンドゥー教が興ったインドにおいても、宗教、民族紛争などにより未曾有の建築が消失、5世紀遺構の石窟寺院を除くと7 - 8世紀の遺構が最古の遺構で、その数も少なく、クメール建築との比較研究を困難にする原因になっている。

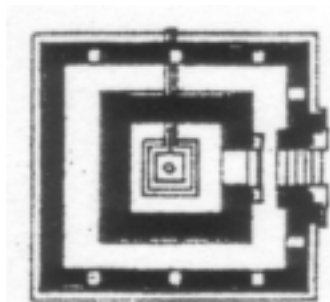
⁶ Han Chei や Phnom Bayan（共にプレ・アンコール期）も二層平面を持つ。

(「偏心空間の長方形祠堂」「八角形祠堂」) 次に7世紀の真臘^{しんろう}の王都であったサンボール・プレイ・クックでは中央塔を中心として諸祠堂・周壁・門を持つ寺院コンプレックスが形成される。しかし、それらの伽藍は単室の堂塔が各々独立して配されている。また長方形平面を持つ建物の内部は、後半部にリンガ⁷等の礼拝物を配した偏心平面を待ち、前半部を礼拝空間とした事跡を想起させる。八角形平面の祠堂も数多く存在する。これら「偏心空間の長方形祠堂」と「八角形祠堂」は前後の時代には散見されず同時代の特徴ともいえる。その他、主室の入口には小さな前室がみられる建物もあり、以後の空間発展の胚芽をみる。

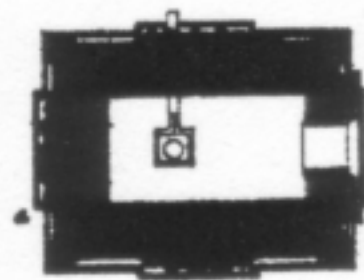
「聖室 + 繞道の二層形祠堂」

「偏心空間の長方形祠堂」

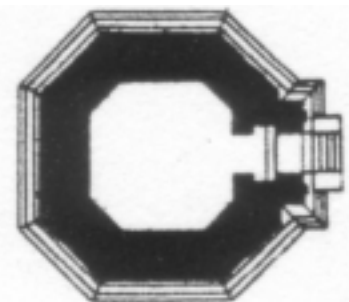
「八角形祠堂」



ラム・マハ・ルセイ



サンボール・プレイ・クック



サンボール・プレイ・クック

3. アンコール期 (9世紀～13世紀)

3-1) 独立建物で構成された簡単な伽藍 (9～10世紀)

プノン・バケンなど10世紀初期頃までの建物では、独立した堂塔が点在する伽藍構成を取る。それら各建物の平面は、内部に矩形の空間を有するのみで、「回廊」はなく、建物を取り囲むのは「塀」である。10世紀初期～中期のプノン・クロム(10世紀初期)、東メボン(951年頃)、バンテアイ・スレイ(967年頃)などの建物になると、塀の周辺に「細長い建物」が建ち並ぶ様になる。しかし、「回廊」はまだこの時期には出現していない(図版A-1)。

3-2) 「前室」の付加と「回廊」の出現 (10～11世紀)

(「前室」) 次の時期の遺跡であるタ・ケオ(1000年頃)では、「五点型の塔」配置には変化はないが、建物中心の方形空間の四方に小部屋「前室」が付加され、平面プランの発展が読み取れる。また「五点型の塔」のうち中心に位置する塔は、他の4つの塔よりも一回り大きく、かつ、^{もとたん}基壇も他の塔よりより一層高められ、前時代の「五点型の塔」よりも中心性が強調される。

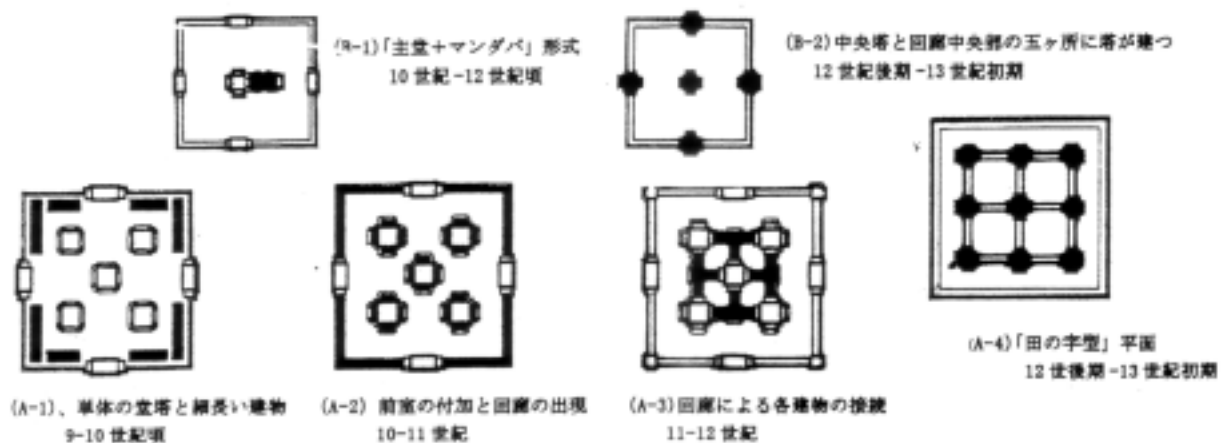
(「回廊」) また前時期に見られた「塀」と「細長い建物」は、この時期では融合して「回廊」が出現する。「五点型」ではないが、タ・ケオより少し早い遺跡のピミアナカス(10世紀後期)では、この「前室の付加」と「回廊の出現」という平面プランの発展が見られる。タ・ケオやピミアナ

⁷ 男根。また、それをかたどった像。ヒンズー教シバ派に属するリンガヤータ派で崇拜され、繁殖を象徴する。

⁸ 建造物の下の基礎になる石や土で築いた壇。

カスなどの「回廊」の幅は非常に狭く、バンテアイ・サムレ（12世紀中期）の「回廊」に至っては入口さえもない。この様な点を考慮すると、クメール建築における「回廊」は、儀礼・祭祀など機能的な要求でなく、外観を飾るための装飾としての建築の意味合いが強いと考えられる。

（「マンダパ」） また10世紀初期(コーケーのプラサット・トムなど)を初見として「マンダパ」⁹と呼ばれる建物が中央塔の前に付加される形で出現する。同建物は中央塔（主体空間）に接続する礼拝空間要素の強い建物で、これ以降「主堂+マンダパ」形式の伽藍（図版 B 1）は、10世紀～12世紀にかけて見られる。



3 - 3) 回廊による各建物の接続（11世紀～12世紀）

（「五点型塔」の「回廊」による接続） 前時代には独立して建っていた「五点型の塔」が、アンール・ワット（12世紀前期）に至り、五点型の各塔が「回廊」で接続される（図版 A 3）。また外側の回廊の隅には「小堂」が建てられる。この回廊隅の「小堂」の出現は、早くはバプオン（11世紀中期）に見られる。

（「周壁」から「回廊」へ） 前時代では「周壁」が二重、三重と中央塔を圍繞するが、バプオン（1160年頃）やベン・メリア（11世紀末～12世紀初）など11世紀後期頃より「周壁」に代わり「回廊」が周囲に廻らされる。またピマイ（12世紀初期）、バンテアイ・サムレ（12世紀中期）など上記「主堂+マンダパ」形式の伽藍や中小の寺院でも、この時代、回廊が圍繞し、「周壁」が「回廊」にとって代わる。

3 4) 伽藍の複雑化、田の字型平面（12世紀～13世紀）

（「中央塔」と回廊中央の五ヶ所に塔が建つ「伽藍」） コンボンスヴァイのプリア・カン、バンテアイ・クデイの当初形態¹⁰そしてタ・ソム（いずれも12世紀末）では、中央塔と回廊中央の五ヶ所に塔が配される形式を取る（図版 B 2）。この形式は、前時代には、回廊や周壁の中央部に配さ

⁹ マンダパ（Mandapa）は、インド建築名称をクメール構造名称に借用した仮称で、インドのマンダパとは異なる。

¹⁰ 同寺院に見られる内回廊四隅の塔は後補。

れた「ゴープラ」の代わりに「塔」が建つ伽藍構成で、より進展した形であると言える。

(「田の字型」平面) タ・プロム、アンコールのプリア・カン、バンテアイ・チュマーなどクメール建築最後の様式であるバイオン期(12世紀後期～13世紀初期)に建てられた大型寺院では、伽藍内の建物数は前時代よりもさらに増加し複雑化する。また中央伽藍は「田の字型」に回廊が配され、その各交点に9基の塔が聳^{そび}える(図版A-4)。この所謂「田の字型」平面の発生に関しては、アンコール・ワットに見られる「回廊により接続された五点型の塔を持つ伽藍」(図版A-3参照)と「中央塔と回廊中央の五ヶ所に塔が建つ伽藍」(図版B-2参照)が発展した形態であると言える。言葉を変えれば、ピラミッド型五点型の大規模寺院と中小寺院の伽藍が、発展・融合し、「田の字型」平面の完成を見たとも言える。

また「回廊」の役割は伽藍に荘厳さを加える装飾的意味合いが強いと前述したが、パンテアイ・クデイの内回廊は、幅も広く回廊内を木造間仕切で区切った痕跡が見られる。装飾としての意味合いを越え、瞑想の場や何か事物を収めるための部屋として機能的に用いられた痕跡を残す。これら仕切られた回廊によりつくられる平面プランは、何処となくアジャンター(インド、5世紀)の仏教石窟を想起させる。バイオン期の寺院が大乗仏教寺院として建てられたことに起因することも含め今後の研究課題である。

4. まとめ

プレ・アンコール期の建築には、「聖室+繞道の二層形祠堂」、「偏心空間の長方形祠堂」、「八角形祠堂」など特徴的な建築が見られるが、この時期の伽藍は、単室の建物が各々独立して配置されており、建物間の連結性は薄い。アンコール期の建築には、前時代の建築を踏襲しながらも「前室」「マンダパ」など主空間に付加される付属空間の発生、「細長い建物」と「周壁」との融合による「回廊」への発展など、単体で簡単であった伽藍がより各建物が連結し複合的な伽藍へ発展してゆく過程が汲み取れた。

本研究はクメール建築平面の変遷を概括したもので資料の遺漏もあり修正すべき点も多い。今後はアンコール地域外、中小寺院の資料収集、分析を進めることにより完成度の高い研究とすることが求められる。

本稿は「クメール建築の伽藍構成についての基礎分析」(日本建築学会学術講演梗概集(東北)2000年9月 荒樋久雄)をベースに加筆・修正したものである。